



佐藤若菜、『衣装と生きる女性たち——
ミャオ族の物質文化と母娘関係』京都大学学
術出版会、2020、310p.

本書は、中国貴州省に暮らす少数民族、ミャオ族の民族衣装をめぐる実践を通じて、母と婚出する娘の関係の動態を生き生きと描き出した民族誌である。分析の核となるのは、女性たちが製作し、身にまとい、大切に保管し、受け継ぐ衣装の物質的特徴や製作工程、衣装そのものに付与される価値の変遷、そして中国社会全体の社会経済的变化とそれに伴うミャオ女性のライフコースの変容である。

以下、議論の流れに沿って全体を紹介しよう。

まず序章では、中国本土と台湾の漢族を対象とした親族研究の展開、親族を媒介するものとしてのサブスタンス論、そしてアクター・ネットワーク論がレビューされ、それらの理論的動向を踏まえたうえで「1990年代以降、中国貴州省のミャオ族女性が娘の民族衣装を保管し続けるようになったことを、モノと人、社会の観点から検討する」(p. 39)という本書のねらいが述べられる。母と娘の関係に注目する本書は、父系原理偏重から脱却し、女性が介在する親族関係の形成・維持へと視野を広げてきた中国親族研究の最新動向に与するものであるが、漢人研究者の視点に立脚し、発展段階説の上に位置付けられがちであったミャオ族の婚姻実践をミャオ族社会の文脈に即して多面的に分析する点に特徴がある。また、人と人のつながりを媒介するモノの力が親子関係に及ぼす影響を、現代中国の社会経済的変容をとらえるマクロな視点と衣装の物質性や価値を詳細に検討するミクロな分析との組み合わせにより描き出すことを意図している。

第1章「ミャオ族と民族衣装」では、中央政府公認の「少数民族」と位置づけられるミャオ族が民族カテゴリーとして形成されていく過程が説明され、西南中国のいくつもの省にまたがって居住

するミャオ族のうち、本書が対象とするのは貴州省東南部に暮らすサブ・グループ「ムウ」の集団であることがわかる。このムウを含むミャオ族の服飾文化を対象とする研究は、政府による民族政策の一環として実施された民族調査をきっかけに開花し、その後日本を含む海外からの注目も広く集めるようになったという。だが大量に出版された研究書や概説書における関心の中心は、サブ・グループ別の衣装の形式や図案、技法などの分類・整理にあり、衣装の変化やそれにかかわる人々の暮らしの動態をとらえようとするものではなかった。この章の最後には、本書の主要な舞台となるS村の地理的特徴、ミャオ族内の異なるサブ・グループや漢族を含む人口構成、生業などが記されている。

第2章「民族衣装の物質性——分類と製作工程を微視的に見る」は、衣装の分類と製作工程を取り上げる。まず、調査時点で民族衣装の着用は儀礼や節日に限られていたこと、衣装に対する男性の関与はきわめて限定的であること、また、衣装の従来の構成要素のうち、ほとんど着用されず、自作されることもなくなったスカート、靴、そして銀装飾については考察の対象から外すことが述べられる。もっとも種類が多く、女性たち自身が製作に携わる頻度の高い上衣は、前身頃、後見頃、袖から構成され、袖と襟の部分に刺繍を施した複数の装飾パーツを縫い付けることで完成する。調査地の女性たちは、基盤となる布の種類、裏地のあるなし、袖の装飾の種類、刺繍の下地となる布の色、用いる刺繍糸の色などの複雑な組み合わせにより、上衣を分類していた。さらに難易度が異なる刺繍技法をどこにどのように施すか、という違いも上衣の分類と結びつく。著者は、このように「製作技法の異なる複数のパーツから構成されている」点こそがミャオ族の民族衣装の物質的特徴(著者によれば物質性)であると指摘する。

第3章「衣装の物質性と製作の変化」では、上記の特徴を踏まえつつ、新中国成立以降に生じた衣装製作工程の変化をたどる。1950年代には、高度な技を要する刺繍の型紙作りを除いては、糸紡ぎから織り、染色、刺繍に至る一連の衣装製作技術を未婚期に習得していることが必須とされてい

たが、1980年頃を境に衣装用の素材が市場に出回るようになり、糸や布を自作する必要がなくなった。パッチワークや模様入りの紐を織る工程についても、村内での専門化が進んだ。ただし、調査村においては上衣用の布の染色と装飾のための刺繍だけは自ら行うべきという規範が維持されていた。その結果、いくつもの工程、いくつものパーツから構成される民族衣装製作のプロセスは、自製するパーツ・工程と購入するパーツ・工程の両方で成り立つ形に変化したことになる。さらに、村内では着用する女性自ら、もしくはその近い女性親族（実母や姉など）が行うことが当然視されていた刺繍に関しても、他の村からの需要に応じて販売用の刺繍を手掛ける女性たちが出現した。興味深いことに、そうした刺繍製作を請け負っていたのは、複雑な刺繍を施した民族衣装を着用する河辺ミャオではなく、漢族や河辺ミャオと社会的忌避関係にある高坡ミャオの女性たちだった。

このように誰が衣装の作り手となりえるのか、という問題と連動して、衣装に託された価値をめぐっても変化が生じた過程を論じるのが「財としての民族衣装——日常着から威信財へ」と題した第4章である。地主・富農層と小作人の間の貧富の差が歴然としていた民国期には、身分によって所有する衣装の数や種類にも明白な違いがあった。多くのミャオ族にとって衣装は自製するしかなく、また少ない枚数を日常着として着用するものであった。新中国成立後、食糧確保が最優先で「衣装どころではなかった」集団農業時代を経て、1978年からの経済改革・対外開放の時代に入ると、食糧事情が改善するとともに徐々に生活の余裕が生まれ、かつて地主・富裕層のみが持ちえた「良い上衣」が庶民の間にも普及し始めた。その背景には、綿布や絹糸が購入可能になったことや沿岸部への出稼ぎによる現金収入の増大といった要因も働き、日常着ではなく礼服としての民族衣装がとくに婚礼の場面において威信財としての価値を持つに至った。また、そのほかの儀礼や節日において、礼服としての民族衣装を身につけることは、民族カテゴリーを可視化させることにもつながった。さらに、少数民族文化の観光資源化やミャオ族の衣装に対する世界的注目を背景に、いざとな

れば換金できる財としての位置づけも与えられることになった。

続く第5章「ミャオ族女性の婚姻とその変容——衣装と女性の『賢さ』」によれば、中国における政策転換はあらたな人口政策とそれを進めるツールとしての婚姻法の制定、計画出産の取り組みを促し、1980年代以降は少数民族に対しても計画出産政策が適用された。さらに義務教育の導入や出稼ぎの常態化により、ミャオ族の間でも、婚姻の時期や配偶者選択をめぐる規範、さらに伝統的な婚姻慣習である「坐家」（結婚後、数年にわたって新婦が実家にとどまり、限られた期間のみ夫方に居住する習俗）にも変化が生じた。かつてこの坐家の期間は、実家から婚家への女性の帰属の段階的移動の一環として女性たちが実母の助けを借りつつ衣装製作に専念できる時間でもあった。しかし、就学期間の延長や出稼ぎへの従事は、坐家期間の大幅な短縮をもたらし、さらに出稼ぎ先で出会った他村男性との婚姻を選択する女性たちも増加した。これらの変化は、単に婚姻のありようを変えただけではなく、衣装を媒介とする母と娘の関係性にも少なからぬ影響を与えることになった。

本書のハイライトともいえる第6章「衣装がつなぐ母娘関係」では、衣装の製作・保管・所有・譲渡をめぐる母と娘の関係の変化が具体的に描かれている。1980年頃までの娘たちは、坐家期間を経て婚家に移動するタイミングで、自ら製作した衣装を持参していた。だが上述のような婚姻慣習の変化とライフコースの変容に伴い、婚礼とはほぼ同時に婚家に移動することになった娘が着用する衣装は、主として実母の手によって製作され、さらに婚礼後も実家で保管され続けるという新たな現象が生まれた。つまり、婚出した娘と母のつながりは衣裳の譲渡が完了するまで持続することになったのである。

第1章でもふれられているように、ミャオ族の衣装の美しさは中国内外から高い関心を集め、多くの書籍で取り上げられてきたが、衣装そのものや製作技術が母から娘に受け継がれるという記述は散見されても、母娘の関係の内実やその変化に踏み込んだ分析は乏しかった。ミャオ族の例に限

らず、精緻な「手仕事」の成果であるアジアの工芸雑貨や民族衣装に対して向けられる外部からのまなざしは、その製作に「注がれた時間と労働がそのモノを特別な存在にする」という発想に導かれ、家族への思いや愛情の表現であるという平板な解釈と結びつくことが多い。だが、本書が説得力をもって描き出しているように、労働に追われ、経済的にも厳しい状況下で自ら日常着を手作りするしかなかった時代から、威信財や潜在的商品としての価値を得た衣装の一部を手作りすることに意味が見いだされる時代、さらに衣装に自ら刺繍を施すことが必ずしも女性としての「賢さ」を体现しなくなりつつある時代への転換を通じて、母たち、娘たちはさまざまに衣装との向き合い方を講じてきた。そこには紋切り型の惹句には回収されない動態がある。

1点、本書で必ずしも十分にに取り上げられていないように見えるのは、衣装の着用の場面である。もはや日常着ではなく礼服の扱いを受ける民族衣装を儀礼や節日にまとうとき、女性たちはどの衣装をどう理由で選択し、お互いにどのような評価をしようのか。本書冒頭でもふれられている布の物質性に着目するならば、衣服の構成や製作過程、技術の修得等の問題に加えて、着心地や手触り、重みといった側面も重要な議論の契機となりうるのではないかと感じた。

また、全体に読みやすい文章であったが、あえて注文をつけるとすれば、こうした「衣装と生きる」女性たちの具体的描写と、中国社会全体や少数民族を取り巻く社会経済状況の変化、政策の変遷といった俯瞰的な背景記述との往還の中で分析を進めていく記述スタイルにもうひと工夫ほしかったように思う。自分が作った衣装の売却を拒む妻、売却を前提とした衣装製作に抵抗を覚えつつも、いつか売る必要があるかもしれないという見込みのもとにデザインを決定する女性、漢族男性との結婚によって衣装とのつながりを断つ娘——このようにアンビバレントな状況を生きる女性たちの姿が随所に示され、興味をかきたてる一方で、それらがもう一つ太い糸に結びあわされていないような感覚を覚え、いささかもどかしかった。オールカラーで多くの写真を添え、章の間に

コラムを配置したり、巻末に読書案内を加えたりするなど、より広い範囲の読者を意識した仕掛けを凝らした本書だからこそその感想である。

(中谷文美・岡山大学大学院社会文化科学研究科)

安藤和雄(編著)、『東ヒマラヤ——都市なき豊かさの文明』京都大学学術出版会、2020、xxi+537p.

本書が対象とする東ヒマラヤは、ブータン王国東部とインド北東部のアルナーチャル・プラデーシュ州(以下、AP州)からなる。ヒマラヤ山脈東部がブラマプトラ川の河谷平野に南面するこの地域は、東アジアの照葉樹林帯の西端としても知られ、植物学や農学分野の研究者にとっては、ぜひ一度は訪ねてみたいところである。ただ、本書でも詳述されたように、入域制限があつて外国人研究者にほとんど門戸が閉ざされた地域であつた。

その地域に編者たちのチームが入り現地の大学と共同調査を開始したというニュースを知ったのはもう15年ほど前のことかと思う。科学研究費補助金による「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較研究」のメンバーとして編者らがまず2003年にアッサム州やマニプル州に入り、その後AP州を訪問している。また、編者が代表者の科学研究費補助金による「ブラマプトラ川流域地域における農業生態系と開発——持続的発展の可能性——」が2005年度から2008年度まで実施され、AP州でも調査が継続された。

さらに幸運なことに、これらと並行して本書第2章の医学班の調査を率いた奥宮清人(以下敬称略)がリーダーとなった総合地球環境学研究所(地球研)のプロジェクト「人の生老病死と高所環境——『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」が2005年度から始まった。アンデス高地とヒマラヤ高地を対象に人の高地適応を解明しようとするこのプロジェクトは2012年度まで実施され、編者も参加してAP州での調査にさらに多くの研究者が参入した。

これらプロジェクトに参加したメンバーは、順次、その調査報告を『ヒマラヤ学誌』に公開した。